

人物語り

ひとものがたり

農業の多様性を認め、 理解を深めあう農家を目指す

とみや 富谷 亜喜博さん



PROFILE

1959年生まれ、千葉県立成東高校卒業、千葉県農業大学校卒業、現在農事組合法人さんぶ野菜ネットワーク代表理事、山武市埴谷地区の専業農家。畑2.3ha作付け、年間約15種類の野菜生産

農協の有機部会から農業法人として平成17年2月に設立した、さんぶ野菜ネットワークの代表理事として意欲的に有機栽培に取り組み富谷さんに話を聞きます。

私は20歳から就農したのですが、そのころでも農業に就くというのは少なくなってきたいて、「よく農業なんかやるね」と口にする同級生などがいました。農業をやるからには、サラリーマンにはできないことをやろうと。農業には、時間に拘束されず、自然環境を相手に、自由な発想で取り組むことができる素晴らしい面があります。しかし、結果についてはすべてが自己責任ですので、やるからには自分で納得のいく仕事をし、自立した農業経営をして

いかなければいけないという思いで就農しました。

たまたま28歳のときに農業や化学肥料を使わない有機栽培※に出会い、J・A山武郡市陸岡支所園芸部有機部会の設立に参加しました。家族からは「そんなやりかたで農家が成り立つわけないだろう」と言われ、期待と不安がありました。

また、一番の問題は、作付はしたものの販売先がなかったことです。当時は、まだ有機野菜の市場流通が確立されていなかったもので、自然食品店など取り扱ってくれそうな会社の手紙を送ったりしながら手探り状態からのスタートでした。幸運にも有機農産物宅配会社から返事をいただきました。いまでは取引先も増え順調に販売することができるようになりました。

始めてみて驚いたのは、直接消費者と結びつく流通なので声がダイレクトに伝わってくることでした。食べた方から直接手紙が届き「たいこんの形は悪いけれどもうまかった」とか「ほうれん草は株元が赤く昔の味がした」という言葉をもらうと、本当に食べるものをつくっているんだということを実感し、見た目より味なんだと、それからは野菜をつくる考え方が変わりました。

有機栽培に取り組んでから早いもので21年が過ぎ、今では48名の仲間たちと共に経営や技術の改善に積極的に取り組んでいます。またその中に新規就農者も加わり、有機の輪が広がっています。

「多様性という言葉があるように、安定生産による市場流通・地産

地産の直売・企業と連携した契約栽培等、農業にもさまざまな変化があつていいと思います。わたしは有機農業に出会い、それを求めている人達と知り合えて成り立っています。そしてやりがいを感じています。」と熱く話します。



※有機栽培：化学肥料や農薬を使用せず、有機肥料などを使って農作物や土の能力を生かす栽培法